

〔論文〕

スコットランドの学校教育と健康・体育に関する指導の特徴と 課題

四方田 健二

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

本論文の目的は、スコットランドの学校教育制度および健康・体育に関する教育の実態を明らかにし、その視点を踏まえて日本の課題を考察することである。スコットランドの教育制度は、柔軟なカリキュラムと教科横断的な学習に特徴がある。子どもの健康・体育に関する指導では、各学校の裁量による運動領域の選択や外部指導者との連携、学習者中心の教授モデルによる情意面の重視といった特徴がみられる一方で、健康、体力の社会的格差、学校へのおやつ持参や自動車通学の多さなどの課題もみられる。

キーワード：教育課程，国際比較，健康教育，体育，スコットランド

Education system and teaching on health and physical education in Scotland.

Kenji YOMODA

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

発行日 2024 年 2 月 28 日

1. 背景

近年、日本の学校教育の伝統的な慣習を見直す議論が活発になっている。その背景には、教師の働き方改革や新型コロナウイルス感染症への対策、人権意識の高まりなどの社会的関心の影響があるといえよう。例えば、教師の職務や学校行事をスリム化し教員、児童生徒、保護者の負担を軽減する工夫が取り入れられている（文部科学省，2021）。また、児童生徒の人権やいわゆる「ブラック校則」に関する問題も報道やSNSにおいて注目を集めている。こうした校則の中には教職員も合理的な理由の説明できないまま慣習として続けられてきたものもみられる（NHK，2020）。行き過ぎた生徒指導や校則を改めたり、ジェンダーレスの制服を導入したりする動きも進んでいる（川口，2023；毎日新聞，2023）。

健康、体育に関する指導においても、新型コロナウイルス感染症の影響や熱中症予防の観点から運動会の時間を短縮し学年ごとの入れ替え制が多くで学校で実施されている（中日新聞，2022）。また、「体育座り」の是非、教室や廊下での着替え、体育着の下着の禁止などの問題、ジェンダーレス水着の導入、部活動の地域移行など、体育指導における慣習に対する議論が活発になっている（J-CAST，2021；産経新聞，2022）。

2020（令和 2）年度から実施されている平成 29 年度改訂学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現とともに、カリキュラム・マネジメントの重要性が強調されている。しかし、探究的な学習への転換は容易ではない（中曽根，2022）。また、カリキュラム・マネジメントは、学校教職員および地域との連携による教育活動

の推進や複数の教科に渡る学習の展開といった組織的、計画的な学習活動が求められる。しかし、時間的な制限や教師の教科横断的な学習への経験不足などから、その実現は容易ではないと指摘されている（徳岡，2018）。

体育科、保健体育科の指導においても「主体的、対話的で深い学び」の実現と体育・保健の「見方・考え方」を働かせた学習が目指されている。平成 29 年度版学習指導要領は、「技を習得すればよかった、あるいは運動能力にたけた生徒が高い評価を受ける、そういった授業からの決別」（福ヶ迫，2018，p. 3）と捉えられる。また、日本の伝統的な体育授業について平尾（2023）は、技能習得に偏重し体育嫌いを助長しやすいこと、集団行動や号令による指示待ちの態度に陥りやすいことを指摘している。

こうした学校の慣習を議論する際に国内の視点からだけでは問題の所在に気付きにくい。そのため、諸外国の事例を参考に日本の課題を改めて検討することは有益であろう。もっとも、国によって学校教育の制度および教育課題や健康課題、社会的背景などが異なるため、これらを踏まえた解釈が必要になる。

2. 論文の目的と構成

本論文の目的は、スコットランドの学校教育制度および健康・体育に関する教育の実態を明らかにし、その視点を踏まえて日本の課題を考察することである。スコットランドは学習者中心のカリキュラムを掲げインクルーシブ教育や大学無償制度などの先進的な取り組みを行っている。しかし、日本でイギリスの教育制度が紹介される場合その多くはイングランドのものである。また、国際比較のデータもイギリスの人口の約 85%を占めるイングランドの影響が大き

い。そのため、スコットランドの教育の実態および社会的な背景について日本で得られる情報は限られている。

次節ではスコットランドの社会的課題について、特に教育および健康に関する現状と課題を整理する。次に、スコットランドの教育制度およびカリキュラムについて整理する。さらに、現地の小学校を事例として学校教育の特徴に加え健康・体育に関する教育について紹介する。

3. スコットランドの概要

3.1. 国土と政治

スコットランドはイギリス（グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国）を構成する4つのカンタリーの1つであり、グレートブリテン島の北部の約3分の1と790の島が含まれる。人口約540万人、面積78,789 km²であり、いずれも北海道（514万人、83,424 km²）と同規模である。国土は北海道やサハリンよりもさらに北のおよそ北緯55-60度に位置し、カムチャッカ半島の北部と概ね同緯度である。主要言語は英語であるが、スコットランド語（Scots）とゲール語（Gaelic）も使われている。ゲール語は固有の伝統および文化のアイデンティティを反映するものとして保護され、ゲール語で教育を行う学校もあり、一般の学校でもゲール語の学習が推奨されている。

スコットランドは中世初期の主権国家であったが1707年の連合法以降、連合王国の一部としてロンドン、ウェストミンスターのイギリス議会によって統治されてきた。それから約300年を経て1999年にスコットランド議会に立法権限が委譲された。2021年の議員選挙では当選議員125人のうち女性議員が45%（58人）を占めた。なお、イギリス議会の女性議員比率は31%、

日本は15%（133位/146か国）である（World Economic Forum, 2022）。

3.2. 気候と食文化

スコットランドの気候は年間の気温変化が比較的少なく、一年を通して雨が降り、ケッペン気候区分では西岸海洋性気候にあたる。北大西洋海流の影響で緯度の高さのわりには温暖な気候となっている。夏季は最高気温19℃、最低気温11℃、冬季は最高気温6℃、最低気温1度となる。日の出、日の入り時間の年間の差が大きく、冬至（2023年）12月22日は日の出8時42分、日の入り15時40分、昼間時間は6時間58分である（エジンバラ）。小学校は一般的に9時から15時であるため、日の出前に登校し帰宅時には暗くなっている。一方で夏至（6月21日）は日の出4時26分（夏時間）、日の入り22時2分、昼間時間は17時間36分となる。曇りや雨天の日が多いことも特徴であり、最も曇りの多い1月は72%の確率で本曇りまたは曇りとなる。冬季の昼間時間の短さと曇りの多い天候のため、日照時間は最も短い12月で約46時間（エジンバラ）であり、東京の冬季の約4分の1である。こうした冬季の日照時間の少なさによるビタミンD不足と暗く雨の多い天候により季節性うつ（Seasonal Depression）や季節性感情障害（Seasonal Affective Disorder: SAD）が注意喚起されている（Parr, 2023）。

イギリスの有名な食事としてフィッシュ&チップスが挙げられるように、揚げ物の多さが特徴といえる。スコットランドで愛されてきた伝統料理はハギス（羊の内臓、ハーブ、オーツ麦、野菜などを羊の胃袋に詰めた料理）である。その他にスコティッシュパイ（羊肉または牛肉を包んだパイ）、スコッチエッグ（卵をひき肉で包んだフライ）、フライドピザといった食事

が特徴的である。スコットランドの成人の平均的な食事は、推奨される 1 日の摂取カロリーを 40% 上回り、脂質、糖分、塩分が多く、野菜や果物の摂取量が少ないことが問題視されている (Food Standards Scotland, 2018)。また、安価で手軽なファーストフードは不健康なものが多く、社会階層による健康格差の一因となっている (Public Health Scotland, 2020)。

3.3. 健康課題

スコットランドは様々な健康課題を抱えている。スコットランドの平均寿命(男性 76.6 歳、女性 80.8 歳)はイギリスの他の 3 つのカントリーよりも短く、ヨーロッパ西側諸国の中で最も短い(National Record of Scotland, 2022b)。また、スコットランドの成人の 67%、子どもの 30% が肥満または過体重とされる (Food Standards Scotland, 2018)。スコットランドのアルコール関連死は近年低下しつつあるものの、イギリスの他の 3 つのカントリーに比べて依然として高リスクである (Gander, 2016)。成人の喫煙者率は 11% (男性 12%、女性 11%) であり、性別による差は僅少である (The Scottish Government, 2022b)。日本の喫煙率(男性 27.1%、女性 7.6%) よりも男性は低く女性が高い。

近年は自殺予防にも力が入れられている。イギリスの自殺率(人口 10 万人あたり)は 11.0 であるが、スコットランドは 14.3 (イングランドは 10.5) に上り、G7 で最も高い日本 (15.7) に近い水準である (Zero Suicide Alliance, n. d.)。加えて、未成年の自殺率の高さが問題視されている。自殺の要因は多様で複合的であり政府や健康関連団体も対策には苦慮している。実際、スコットランドの生活満足度はイギリスで最も高いというデータもある (Office of National Statistics, 2018)。

3.4. 運動、スポーツ

スコットランドで特に人気の高いスポーツはサッカーであり、イギリスの中でも独立した代表チームを組織し、スポーツ報道の多さやスポーツバーの盛り上がりからも関心の高さが窺える。最大都市グラスゴーを本拠地とするセルティックとレンジャーズは例年スコティッシュ・プレミアリーグのトップを争い、両チームの直接対決はオールドファームとして盛り上がることは有名である。ラグビーも独立した代表チームを組織しており伝統的に人気が高い。ゴルフはスコットランド発祥とされ、世界最古のゴルフ場セントアンドリュースはゴルフの聖地といわれる。カーリングもスコットランドが起源とされる。シンティ (Shinty) はフィールドホッケーに似たスコットランドの特徴的なスポーツである。また、伝統的な多種目のスポーツ大会として、夏季にハイランド地方を中心にハイランドゲームが行われている。丸太投げ、ハンマー投げ、岩石投げ、綱引きなどの競技とキルト衣装によるダンスなどのイベントが各地で行われる。

一般の成人のスポーツ参加では、ウォーキング、サイクリング、エアロビクス、ジムトレーニング、ランニング、水泳が多い (The Scottish Government, 2022b)。成人の運動実施率 (WHO 推奨基準: 週に 150 分以上の中強度運動もしくは 75 分以上の高強度運動、またはその組み合わせ) は約 69% (男性 73%、女性 65%) であり、2012 年 (63%) 以降継続的に増加している (The Scottish Government, 2022b)。なお、日本の成人では 53.3% (男性 59.6%、女性 46.9%) である (笹川スポーツ財団, 2023)。子ども (5 歳～15 歳) の WHO ガイドラインの推奨基準である 1 日に 60 分以上の運動の実施率 (学校活動

を含む) は 71% (男子 76%、女子 67%) である (Hughes et al., 2018)。ただし、子どもの身体活動の 57 か国の国際比較では、下から 2 段階目の D+ (イングランドは C-、日本は最も高い B-) となっている (Aubert et al., 2022)。

3.5. 健康格差

憂慮すべき社会的な課題として、社会的階層による健康問題の格差が大きいことが挙げられる。各地域の雇用、収入、教育、医療、住宅などの困窮度を示す SIMD (Scottish Index of Multiple Deprivation) と様々な健康問題が関係している。平均寿命は最も社会的困窮度の高い地域と低い地域で男性 13.7 年、女性 10.5 年の差がある (National Record of Scotland, 2022b)。アルコール関連死のリスクや肥満率、喫煙率、薬物乱用、自殺率などの様々な健康問題についても同様の傾向がある (National Record of Scotland, 2022a, 2022b)。こうした健康格差は子どもにもみられ、社会的困窮度の高さは小学生の肥満リスクの高さ、運動参加機会や環境の不十分さ、テレビ視聴、ゲームプレイ時間の長さなどの健康問題や運動不足の要因と関連している (Reilly and Bardid, 2021)。

4. 学校教育

4.1. 教育課程

スコットランドは 1496 年に世界で初めて義務教育制度を設けた。もともと、対象は貴族と土地所有者の長男であった。イギリス国内ではカンタリーによってそれぞれ異なる教育制度、カリキュラムが実施されている。

小学校、中学校ともに基本的に居住地地域の学区 (catchment area) の学校に入学する。学区外の学校への入学希望を申請することもできるが、学区内の児童が優先される。入学者の調整

は自治体 (council) が行う。入学後にも希望を継続申請することができ、児童数の変動により小学校の途中の学年で転校が認められる例もある。宗教系学校 (denominational schools) は一般の学校よりも広い学区をカバーしている。宗教系学校に通うために宗派に属する必要はないが、宗教的な背景を持つ家庭の子どもには優先権が与えられる。宗教系学校も他の学校と同じカリキュラムで運営されているが、宗教行事の時間や信仰の指導者による講話などがある。

スコットランドの学年歴は通常 8 月 16 日頃に始まる。9 月に始まるイングランドよりも 2 週間ほど早く学年歴が始まり、終業も 2 週間ほど早い 6 月下旬となる。

小学校入学は誕生日によって 3 月 1 日を基準とし 4 歳半から 5 歳半にあたる^{注1)}。ただし、入学時に 4 歳の場合入学を 1 年遅らせる選択 (deferred entry) も可能である。イングランドでは 9 月 1 日における年齢を入学の基準とするため、イギリス国内で引っ越しをする場合学年が変わる場合がある。学年段階も Reception を Year 1 の前に設けるイングランドとは異なる (表 1)。

表 1 イギリスの小学校の学年段階

年齢	イングランド/ ウェールズ	北アイルラ ンド	スコットラ ンド
4-5	Reception	Year 1	P1
5-6	Year 1	Year 2	P2
6-7	Year 2	Year 3	P3
7-8	Year 3	Year 4	P4
8-9	Year 4	Year 5	P5
9-10	Year 5	Year 6	P6
10-11	Year 6	Year 7	P7

義務教育期間は P1 から S4 (15 歳) までの 11

年間である^{注2)}。初等教育は7年間、中等教育は最大6年間の教育が行われる。S4が義務教育の最終年度であるが、S4歳以降も多くの生徒が在籍を続ける。表2に教育制度の概要を示している。

中等教育学校は地域によってさまざまな名称で呼ばれ、中等学校 (secondary school)、高等学校 (high school)、アカデミー (academy)、グラマースクール (grammar school) 等がある。その他の学校として、特別支援学校 (special schools)、ゲール語学校 (Gaelic schools)、私立学校 (private/independent schools) がある。なお、イングランドではパブリックスクールは私立学校を指すが、スコットランドでは公立学校を指す。

義務教育段階における学校への出席は子どもの教育を受ける権利を守るために重視されている。学校を欠席する場合は学校に連絡し、一定期間の欠席の予定がある場合は文書で校長に申請する必要がある。体調不良や特別な事情がある場合は学校に申請すれば許可欠席 (authorised absence) となり、連絡がない場合や理由が認められない場合は無許可欠席 (unauthorised absence) として記録される。キリスト教系の学校では、宗教関連行事に児童を参加させないことを申請することができる。ただし、観光客が集中し高額となるハイシーズンを避けることを理由とした家族旅行の欠席は無許可欠席と記録される。無許可欠席の状況は学校の監査で追及されるため厳密に記録を残す必要がある。スコットランドの地方教育省は児童を学校に通わせない保護者に出席命令を出すことができ、保護者が正当な欠席理由を説明しない場合は起訴される。なお、イングランドでは義務教育段階の欠席に対して保護者に60ポ

ンド (約1万円) の罰金が科される。

4.2. 学級編成

小学校は都市部でも各学年1, 2学級の比較的小規模の学校が多い。学級人数はP1は25人まで、P2~P3は30人まで、P4~P7は33人まで、複式学級 (composite class) はいずれの学年も25人までと規定されている。スコットランドのほとんどの小学校では複式学級が実施されている。低学年の学級人数が少なく規定されていること、入学人数の変動に柔軟に対応することが理由である。また、学校の教員数は各学年の人数ではなく在籍児童数に基づいて配分されるため、学校長は在籍児童数に対して効率的な学級編成が求められる。日本の「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」では小学校の場合他の学年と合わせて16以下 (小学校1年生を含む場合は8人) とされており、児童数の少ないへき地等の小規模校で複式学級が実施されている。一方スコットランドでは小規模校の例もあるが、児童数が学級編成基準を超える場合に実施される例が多い。実際、人口最大都市グラスゴウの84%の小学校が複式学級を導入している (Borbely et al., 2021)。例えばP2とP3 (上限30人) がいずれも31人の場合、1) 両学年を分割して4学級 (15, 16人) にするか、2) P2, P3の2つの単学年学級 (21人) を作りP2/3の複式学級 (20人) を1つ作る方法がある。後者は2学年で3学級を編成するため、教員や教室などのリソースを効率的に運用することができる。ただし、教員組合からは教員の雇用予算の削減により複式学級が常態化し適切な教員数の確保と教育の質保証ができていないと問題視されている (Macnab, 2021)。他方で、複式学級は上の学年の児童の学習に悪影響はなく、下の学年の児童の学習に恩恵があ

り、特に P1 児童の学力向上に効果があることが報告されている (Borbely et al., 2021)。

4.3. 単位認定と評価

スコットランドの教育課程は国の単位認定の枠組み (Scottish Credit and Qualifications Framework) によって規定され、Scottish Qualifications Authority (SQA) が管轄している。全国学力評価 (Scottish National Standardised Assessments: SNSA) は児童生徒の学習状況を把握し教育に活かすことを目的として 2017 年に導入され、P1, P4, P7, S4 において、語学 (リーディング、ライティング) と算数/数学の試験を受験する。試験日は一斉ではなく各学校で異なり各科目も別の日程で実施される。試験はコンピュータを用いて実施され、

児童の習熟度によって問題の難易度が変化する。この試験制度は個々の児童の習熟状況を把握し指導に活かすことを目的としているが、教師からは批判的な意見が多いようである。4, 5 歳の P1 の児童に試験を受けさせることの是非やコンピュータ操作の慣れが必要なこと、カリキュラムの目標とテスト内容が一致していないこと、試験実施と評価にかかる時間の負担等が指摘されている (Drummond, 2022; Tes, 2019)。

後期中等教育の間に、生徒は Scottish National Qualifications の単位を取得する。この中には、語学、科学、数学、美術、演劇、体育など幅広い領域が含まれる。S3, S4 (14, 15 歳) で多くの生徒は National 4/5 の認定を受ける。National 5 の科目は 6 科目前後が一

表 2 スコットランドの教育制度

年齢	学校	学年		学習ステージ	試験
3-4	Nursery			Early	
4-5	Primary	P1	義務教育		SNSA
5-6		P2		First	
6-7		P3			
7-8		P4			SNSA
8-9		P5			Second
9-10		P6			
10-11		P7		SNSA	
11-12	Secondary	S1		Third/fourth	
12-13		S2			
13-14		S3			SNSA
14-15		S4		Senior phase	National 3/4/5
15-16		S5			National 4/5; Higher
16-17		S6	National 5; Higher; Advanced Higher		

般的だが、1, 2 科目から 8, 9 科目まで個々の生徒の選択により違いがある。S6 への進級を希望する生徒は Higher や Advanced Higher (CSYS) を取得する。S5 から大学進学が可能であるが、現在では Higher や Advanced Higher を修得するために S6 への進級が一般的になっている。ただし、この枠組みを抜本的に改革することが 2022 年に発表され、SQA に代わる新たな教育管理機関を 2024 年までに構築することが目指されている (The Scottish Government, 2022)。

4.4. 大学教育

スコットランド出身者の大学授業料は 2008 年以降政府が肩代わりして納めているため実質無料となっており。大学無償制度はイギリスではスコットランドでのみ実施されている。従来は EU 出身者も授業料無料の対象であったが、イギリスの EU 離脱の影響で 2021 年以降の入学生は対象外となった。政府は大学無償制度が社会的困窮度の高い地域からの進学率を高め教育の機会均等に貢献していると主張するが (The Scottish Government, 2022a)、その効果を疑う批判もある。例えば、スコットランドの最も恵まれない地域の生徒の大学進学率は、授業料の必要な他の 3 つのカントリーに比べて低く、イングランドの約 2 分の 1 である (Ross, 2017)。最も恵まれている地域とは約 4 倍の開きがありその格差はイギリス国内で最も大きい。将来高収入の職に就くことが見込まれる大学生に税金を使うことで社会的不平等の再生産を助長しているという批判もある (Green, 2021)。また、財政維持のために一定数の国外出身学生を受け入れることが必要となり、スコットランド出身者の入学者枠が設けられ、むしろスコットランド出身者が希望する大学に入ることが難しくな

っているという指摘もある (Brown, 2021)。

4.5. LGBT インクルーシブ教育

スコットランドは LGBT 等に関する法整備が最も進んでいる国の一つである。2021 年には世界で初めて LGBT 教育を全学校で学習することを義務付けた。LGBT 等の権利や歴史、多様性の尊重に関して学習資料が公開されている。児童生徒の学校内で用いる名前、敬称、性別についても希望を受け入れるガイドラインが示され、戸籍上の性別の変更や保護者への通知をせずに児童生徒の意思で学校籍の性別の変更やインフォーマルな性別や敬称の変更など様々な対応の指針が示されている。例えば、ガイドラインでは 4 歳の児童が自分の意志で自分の学校での性を決めることができる (Care, 2023)。ただし、性の多様性についての理解を深めていない早い時期での指導により子どもの不安や混乱を招くと指摘する専門家もいる (The Scotsman, 2018)。性別変更の要件を緩和するなどの前衛的な法改正が進んでいるが、賛否の社会的議論やイギリス政府からの干渉による政治摩擦も生じている。ラグビーなどスポーツにおける性自認による参加の是非に関しても議論は続いている。

4.6. 学習成果

PISA 国際学力テスト 2022 によると、イギリス国内では概してイングランドの成績が最も高く、ウェールズが他のカントリーを下回る。表 3 にスコットランドとイギリス、日本の結果を示している。スコットランドは 2022 年調査では読解力で OECD 平均を上回り、数学的リテラシーと科学的リテラシーでは OECD 平均と同程度であった。しかし、読解力のスコアは堅調であるものの、数学、科学の成績が 2013 年以降低下しつつあることが懸念されている。社会的に不利な地位にある子どもの成績への影響は OECD 諸

国と同程度であり、最も格差の大きかった 2009 年に比べ改善しつつある。

表 3 PISA 2022 国際学力テストの結果

分野	日本	イギリス	スコットランド	OECD 平均
数学	536 (5 位)	489 (13 位)	471 -	472 -
読解	516 (3 位)	494 (13 位)	493 -	476 -
科学	547 (2 位)	500 (14 位)	483 -	485 -

4.7. カリキュラム

スコットランドのカリキュラム (Curriculum for Excellence: CfE) は 2000 年代初頭から議論され約 10 年かけて整備されてきた。

(1) 教育の目標

CfE は学習者中心の考え方を根幹としている。全ての子ども及び若者に次の 4 つの基本的な能力の育成を保証することが掲げられている。

- ・ Successful learners
- ・ Confident individuals
- ・ Responsible citizens
- ・ Effective contributors

(2) 学習領域の構成

小学校では次の 8 つの学習領域が設けられている。中でも、語学、算数、健康は特に重要な領域として、全教職員が責任を担うべきであると強調されている。

- ・ Expressive arts 芸術
- ・ Health and wellbeing 健康
- ・ Languages 語学
- ・ Mathematics 算数
- ・ Religious and moral education 宗教 / 道徳
- ・ Sciences 科学 / 理科
- ・ Social studies 社会

・ Technologies.

技術

(3) Health and Wellbeing

Health and Wellbeing 領域には下記の 6 分野があり、体育は「体育・スポーツ活動」に位置づけられている。

- ・ Mental, emotional, social and physical wellbeing
- ・ Planning for choices and changes
- ・ Physical education, physical activity and sport
- ・ Food and health
- ・ Substance misuse
- ・ Relationships, sexual health and parenthood

体育の目的は学習者に身体能力及び技能を高め、個人的、対人的なスキルと特性を発達させるための場を提供することである。義務教育段階の全ての学年で毎週 2 時間以上の体育授業を実施することが規定されている。なお、CfE の科目の中で時間数の規定が設けられているものは体育のみである。

どの運動種目を行うかはカリキュラムに日本の学習指導要領解説のように詳細に例示されていないため、各学校、教員の裁量が大きい。ボール運動、球技では日本と比較して特徴的な種目としてクリケット、ホッケー、ターゲット型のゴルフ、アーチェリー、カーリング、ボーリングが実施されることがある。武道に関する内容はカリキュラムに含まれていない。ただし、外部講師による武道の指導を体験する例もある。

イングランド、ウェールズと異なりスコットランドでは水泳はカリキュラムに規定されていない。一部の自治体では小学校から公共プール

へバスで移動して水泳学習を行っている。しかし、自治体によって学校での実施状況に差があり、民間スイミング教室に通うためのアクセスや家庭環境によっても左右され、子どもの水泳経験に格差が生じやすいことが課題となっている（Daily Record, 2015）。実際、泳げないまたは水泳の経験のないまま小学校を卒業する子どもは約 40%とされる。

ダンスは芸術（Expressive Arts）領域の演劇（Drama）、音楽（Music）、デザイン（Design）と並ぶ内容の 1 つに位置付けられているが、体育の運動技能の内容にもリズムに合わせた運動が例示されている。

4.8. 体育科教育における課題

スコットランド体育連合（Association for Physical Education for Scotland）は体育指導の原則と体育授業実践における課題について、次のように示している。

(1) 体育指導の原則

- a) PE is developmentally appropriate（発達段階に応じた適切な指導）
- b) PE is inclusive（誰もが参加できる）
- c) PE is connected（他の教科と関連付け学習）
- d) PE is life wide（日常生活に活かす）

(2) 体育授業実践における課題

- a) Experiential and active learning in physical education（アクティブラーニング、日常生活と関連した実践的学習）
- b) Different curriculum models（多様な教授モデルの適用）
- c) Interdisciplinary/cross-curricular learning（教科横断、学校教育全体を通じた学習）
- d) Effective partnerships（学外機関との連

携、アクティブ・スクール・プロジェクトの活用）

体育研究の第一人者である Kirk et al. (2018) はスコットランドの学校体育の肯定的側面として、カリキュラムの中核に位置付けられ、他教科と同様に大学進学のための単位認定の科目として扱われていること、体育専科教員が一部の小学校で導入されていること、アクティブ・スクール・プロジェクトとの連携でスポーツ活動の充実が進んでいることを挙げた。一方で、課題として、社会的困窮度による運動経験の格差や若者のメンタルヘルスの問題が深刻であること、伝統的な技能偏重、教師の直接指導による授業が残っていることを指摘した。こうした課題に応じた体育学習のために、学習者中心かつ情意面の学習を重視する教授モデル（スポーツ教育モデル、TGfU、協同学習、責任学習など）^{注3}を基にした学習の必要性を指摘している。

5. 小学校の事例

5.1. 事例校の概要

本節では、スコットランドの小学校を事例とし学校教育活動および健康・体育に関する指導の実態を概観する。事例校はグラスゴー近郊の公立小学校（カトリック系）である。児童数は約 200 人、7 学年で 8 学級の学校である。P3 までの 3 学年（90 人）で P1, P1/2, P2/3, P3 の 4 学級を編成している（各学年を 2 学級に分けた場合は 3 学年で 6 学級になる）。筆者の息子は 2022 年 9 月の時点で 5 歳 4 か月であり、日本では保育園年長であったが P2 に配属された。娘は 8 歳 2 か月（日本の小学 3 年生）で P5 に配属された。英語能力の不安のため年齢より下の学年への配属を希望したが認められなかった。

事例校は親切、尊重、誠実(kindness, respect,

honesty) を理念とし、健康促進校 (Health Promoting School)、エコスクール (ECO-Schools Green Flags)、糖尿病児ケア優良校 (Good Diabetes Care in School Award) と認定されている。

5.2. 教育活動の概要

(1) 年間行事

入学、進学は8月中旬、終業は6月下旬である。長期休暇は12月下旬から1月上旬、4月のイースター休暇、6月下旬から8月中旬の夏季休暇となる。また、10月と2月に1週間程度の間隔休暇がある。長期休暇は長いが祝祭日は日本に比べて少なく、St Andrew's Day (11月30日) と May Day (5月第1月曜日) のみである (2023年はチャールズ3世戴冠式のため5月8日が休日となった。他に4月や8月、12月の国の祝日はあるが小学校では長期休暇中に当たる)。始業式、終業式は行われなため、長期休暇の前後も通常授業日となる。短縮授業期間もない。事例校では司祭を招いての説法や近隣の教会でのミサなどキリスト教関係の行事が月に1度程度行われている。また、クリスマス関連行事が11月から12月にかけて毎週のように行われる。

(2) 家庭との連絡

保護者への事務的な連絡は携帯電話のメッセージ機能での一斉送信が主な手段となっている。体調不良などで欠席する場合は9時30分までに学校事務に連絡をする。P4までは週ごとに行事の連絡や学習内容に関する連絡帳を共有している。P5以降はGoogle Classroomで家庭学習が行われる。基本的にノートなどを持ち帰らないため、家庭との学習状況の共有のためにオンラインツール (Seesaw) も用いられている。保護者のアカウントに担任教諭から図工の作品

や理科の実験の様子などの写真やコメントがアップロードされる。

(3) 持ち物

筆記用具、ノート、文具など学用品は全て学校が用意するため、持ち物は基本的に不要であり、忘れ物をすることもない。時間割表が配布されておらず、リュックサックの中は水筒とおやつのみである。体育のみ週に2回各学年で曜日が定められており、着替えとシューズを持参する。そのため通学バッグの容量や耐重量を気にする必要がなく、ランドセルのような定型のバッグではなく、子どもの成長に合わせたリュックサックを選択することができる。携帯電話の持ち込みは禁止されていないが、校内では電源を切り目立たない場所に保管する必要がある。

(4) 制服

自治体は児童の安全性、規律、集団意識の向上のため各学校に制服を推奨している。学校指定のカラーのネクタイ、校章のついたブレザーが制服販売店で購入できる。白ワイシャツ、グレーのパンツまたはスカート、赤色のブレザーは量販店で売られている一般的な製品を使用できる。筆者らは学校に寄付された制服からサイズの合うものを数着譲り受けることができた。学校や保護者が不要になった制服を回収し譲渡したり学校祭のチャリティーで販売したりする。制服の規定は校則というよりはドレス・コードとされており、制服の非着用により教育機会が奪われることはないという学校ハンドブックに記されている。学校行事 (校外学習やキリスト教関連行事) の際はネクタイの着用を求められるが、通常はポロシャツを着用しネクタイを締めない児童が多い。シューズは基本的に黒色系とされているが、スニーカーやブーツなど様々な色、形態のものが使用されている。アク

セサリー類は他の児童に危害を与えないようなものに限られ、体育授業の前に外しておく必要がある。制服を着なくても良い日が設定されることがあり、自由な服装で通学する場合は1ポンドの募金が推奨される。

(5) 授業日課

小学校の修業時間は9時から15時である。朝8時45分から校門が開けられ、下校時間はP1からP7まで全学年共通で15時である。午前の休み時間は10時30分から10時45分に設定されている。時間割は柔軟で各担任の裁量で週ごとに授業計画が設定されている。1日に概ね3領域の学習を行っていたようだが、後述のように教科の壁が明確ではなく、日本のように「今から社会の授業を始めます」ということはない。

日直、朝の会、係活動は基本的にない。児童による校内清掃もないため清掃指導も必要ない。

金曜日は「ファン・フライデー」として、私服通学やおもちゃ持参が認められたり、午後に他学年の児童と遊ぶ交流会が行われたりする。また、毎週金曜日には学校の理念に貢献した児童が数名推薦され、ホットチョコレートと菓子が振る舞われる。

(6) 教育活動

教科書がないため、民間出版社のワークブックやオンラインの学習資料が用いられることが多い。各教室に大型テレビが設置されており、学習資料の提示や映像視聴に用いられている。学習内容によって様々な学習形態がとられ、習熟度別のグループや各自で算数の学習ソフトでドリル練習をするなど学習者の実態に合わせた学習が一般的になっている。また、誉める指導が多く頻繁にご褒美シールをノートや服に貼ってもらえる。宿題は授業期間中も長期休暇中も基本的に課されない。

(7) 教科横断的学習

スコットランドの学校では特に小学校段階において、設定されたテーマの学習に教科横断的に取り組むという特徴がある。例えば、事例校では2—3月に「スコットランドの理解」をテーマに設定していた。日本のように社会科を中心に郷土の学習を行うのではなく、教科の枠を超えてテーマに取り組む。全学年がそれぞれ表4のように主要テーマを設定していた。例えば動植物の観察や学習、産業の理解や施設見学、伝統的な歌の学習、ランドマークの絵画のようにテーマに関連付けた学習内容に教科の枠を超えて取り組む。健康領域関連では郷土の食文化と健康的な食事の選択を理解したり、伝統的なフォークダンスを学習、体験するといった活動が行われる。社会見学も各学年のテーマに関する場所を訪れる。5年生はクライド川（産業の歴史）、2年生はグレートカンブレイ島（島の生活）を訪問した。もっとも、テーマに関する学習と並行してSTEM教育の枠組みで科学、数学、技術に関わる学習も行われている。

表4 各学年の主要テーマ

学年	主要テーマ
P1	スコットランドの島の生活（Katie Morag 絵本から）
P2	地元の町の探求
P3	スコットランドの動植物
P4	スコットランドの食文化
P5	グラスゴー（クライド川）の産業
P6	スコットランドの史跡、名所
P7	スコットランド議会

(8) 英語の補習指導

英語を母語としない児童のための補習指導のために週に1回自治体の補助教員が各校を巡回訪問している。事例校では対象児童は筆者の子ども達だけであった。指導の際にはGoogle 翻

訳を使って日本語と英語の確認をしたり、オンラインの発音教材を用いたりしていた。この英語の補習指導ではクラスの授業と異なり簡単な宿題があり毎回ノートを持ち帰っていたので、家庭で学習のサポートをすることができた。また、オンラインの英語学習サイトのアカウントを貸与してもらい、英語絵本の読み聞かせや英語学習ゲームを家庭で利用することができた。

(9) 保護者面談

保護者面談 (Parent Evening) は年に2回行われる。平日2日間の授業後から夕方の希望時間から保護者がWebで先着順に空いている時間枠に予約を取る。面談のために授業を短縮して早く帰宅させることはなく、通常通りの授業時間の後に設定される。時間は10分間で児童の学校での様子についての説明と質疑応答が行われる。待ち時間に保護者は児童のロッカーに保管されている授業ノートを閲覧できる。普段ノートを自宅に持ち帰らないため、保護者はこの機会に子どものノートの内容を確認することができる。筆者の子ども達は家庭での学習のサポートのために週末にノートを持ち帰らせるよう依頼し了承を得ることができた。

(10) 学習費用

日本の公立小中学校の授業料は無償だが、文房具や学習ドリル、絵画セット、書道セット、裁縫用具、リコーダー、鍵盤ハーモニカ等の学用品にかかる学校教育費（隠れ教育費）が存在する（中国新聞、2023）。児童生徒1人あたりの年間の学校教育費（給食費除く）は公立小学校では約6万6000円、公立中学校では約13万2000円とされる（文部科学省、2022）。スコットランドでは学用品は全て学校の用意したものを使えるため、各家庭で購入する必要はない。そのため制服と体操服を寄付品で調達できれば

学校関連でかかる費用はほとんどない。一方で、学校の施設の面では、実習室や体育施設などは、日本の方がはるかに充実している。

P6以上で給食を希望する場合は給食費が請求される。遠足のバス料金やランチ、行事の特別メニューなどのために集金がある場合がある。これらの支払いはオンラインのシステム (Parent Pay) で決済される。

5.3. 健康・体育に関する指導

(1) 給食

給食メニューは自治体の学校で共通となっている。Week 1、Week 2の2週分のメニューしかなく年間を通して隔週で交互に提供されていた（2023年度からは3週分に増えた）。メインのおかずはA、Bの2種類から当日朝に教室のタブレットで一人ずつ選択する。給食メニューはスープ、メイン、デザートで構成され、脂質や塩分に関する国の栄養基準に基づいている。スコットランドの一般的な外食メニューに比べると健康に配慮されている。メインの片方はヴィーガン食を選べるようになっている。例えば、チキンバーガーまたは野菜バーガー用に肉、魚のメニューと野菜のメニューから選択できる。追加で自由にもらえるフルーツとして、リンゴ、バナナ、オレンジがバスケットに用意されている。

給食の時間には体育館に移動式のテーブルと椅子が設置される。児童が各自でスタッフから受け取り自由な席で食べる。食前、食後のあいさつも準備のできた児童から食事を始める。

年間を通して同じ給食メニューだが、事例校はカトリック系であるためキリスト教関連行事を大切にしておりキリスト教の習慣や行事に関連したメニューの提供がある。12月にはクリス

マスの特別メニューでランチパーティーが行われる。2月のShrove Tuesdayにはパンケーキに各自でアイスをトッピングができる。イースター休暇前の3月にはイースターチョコエッグにトッピングする機会がある。これらは地元スパー等の協賛で実施されている。

スコットランドの公立学校では P5 まで無料で給食を提供しているが、2024 年から P6、P7 を含む小学校全学年に拡大することを政府公約にしている (BBC, 2023)。給食は児童にとって貴重な栄養源であり、特に貧困家庭の子どもの福祉として重視されている。P6 からは有料となるが、日本のように全員が給食を食べるわけではなく、給食費を払うか弁当を持参するかを選ぶことになる。P6、P7 の児童で給食を購入せずに弁当を持参する児童の中には、チキンナゲットとプリングルスが詰められたタッパーの例もあるという (娘談)。食材廃棄の削減と貧困家庭への支援を目的として、一部の学校では給食の残りの食材を希望する児童が夕食用に持ち帰れるようにしている (McEvinney, 2019)。ウェールズでも 2023 年の入学生から無料給食が導入され、イングランドでは Year 2 までの児童を対象としている。貧困家庭の子どもの高い食事を提供するという社会的な要請がある一方で、裕福な家庭の子どもにも無料給食が提供されることへの批判もある (Butcher, 2022; Thomson, 2022)。

(2) おやつ

学校にはおやつ (snack) を持参することが認められている。スクールハンドブックでは健康的なおやつが推奨されているが、特に内容や量について教師からチェックや指導はされていないようである。アレルギーのある児童への配慮から、ナッツを含む菓子は禁止されている。

(3) 体育授業の着替え、シューズ

体育授業の服装としてスクールハンドブックではポロシャツ、トレーニングパンツ、運動シューズが記載されているが、制服、通学用革靴のまま授業に参加する児童もいる。シャツを着替えずに済むよう体育授業のある曜日はポロシャツでの通学が推奨されている。安全のため体育授業時のアクセサリは禁止されているが、ピアスの着脱が自分でできない場合はテープで覆うようにする。

(4) 通学

登下校は保護者の送迎が必須である。子どもが複数人いる家庭では 10 年近く送迎を続ける必要があり、共働き世帯の場合祖父母の協力が不可欠である。事例校の送迎者は母親約 6 割、父親約 2 割、祖父母約 2 割ほどであった。10 名ほどの児童は学童保育の迎えを利用していた。約半数以上は自動車の送迎で通っている。子どもの身体活動の国際比較では、通学においてスコットランドは D-、徒歩通学が主の日本は最高の A-となっている (Aubert et al., 2022)。筆者らのアパートから学校まで約 2 km を徒歩で通学していたが、時間がかかるので途中からキックスクーターを購入した。なお、1 マイル (1.6 km) 以上の通学者には自治体の通学補助の制度があるが、年度途中のため申請できなかった。

(5) 体育授業

体育授業は学年ごとに週に 2 回の曜日が定められている。例えば、マット運動では全体練習、各自の運動課題に取り組む時間、希望者の演技発表の時間などがあり、日本の学習活動と似ている部分もある。日本との違いとして、整列や集団行動の指導をしない、準備運動は体操ではなく導入の遊びやドリルゲームから始まることなどがある。その他の教材の特徴として、ドッ

ジボールでは外野がなく、ボールを当てられた児童はベンチで座って待機する。鬼遊びでは捕まった児童が座って待機する事例もあり、一部の児童の待機時間の懸念がある。

(6) 体育施設

事例校の屋外施設はフットサルコート 1 面、バスケットボールコート半面、アスファルトと芝生の校庭であった。校庭には木とロープのアスレチック遊具のような固定施設が設置されているのが一般的である。スコットランドの学校では日本の小学校のような鉄棒、登り棒、ジャングルジム等はほとんどの学校ではみられない。雨が多いため校庭は基本的にゴムチップかアスファルトまたは人工芝で覆われている。土のグラウンドはほとんどの学校ではみられず、走り幅跳びを行うような砂場も設置されていないことが多い。鉄棒はスコットランドの公園でも 10 か所に 1 か所ほどしか設置されていない。その場合でもバーが太いため幼児や低学年の子どもには親指でしっかりと握ることが難しい。また、支柱の間隔が 1.2m 程の幅であるため、ぶたの丸焼きや地球回り、横とび越し下りのような運動は困難である。一部の中学校、高等学校では屋内プールが設置されているが、小学校には一般的にプールはない。体育館の壁面に可動式の雲梯、縄上りなどの設備が設置されており、体育授業で使用する時のみセットされ普段は壁面に折り畳まれている。

(7) スポーツデー

夏季にスポーツを楽しむ日としてスポーツデーが実施される。事前の練習を要する種目や演目は行われない。リレー、障害物競争、ボール運び、玉入れなどの運動 (potted sports) が典型的であり、縦割りのチームで競い合う。

(8) クラブ活動

週 1 回、希望者を対象に授業後にサッカー、ホッケー、マルチスポーツ活動などのクラブ活動がある。約 2 か月単位で参加希望者の募集がある。人気のサッカーは申込初日には定員が埋まっていた。参加費は無料であり、近隣の公共スポーツクラブの外部指導者が派遣され指導を行う。

(9) 体育授業外の運動

各クラスの授業時間の規定は緩やかであり、体育授業外での運動機会も取り入れられている。昼休み前後や下校前の時間に校庭でレクリエーションを行うことあった。校庭で学習を行う場面も多く、チョークで校庭に算数の図形を描いたり単語のスペルの練習をする活動がよく行われていた。

(10) 健康週間

イースター休暇前の 3 月最終週の月曜から木曜は健康週間 (health week) が設定され、校内で様々なスポーツ活動が実施されていた。そのため、この期間は運動着での通学を許可される。活動内容は、バレーボール、ネットボール、サッカー、バスケットボール、ハンドボール、カーリング、ドッジボール、テコンドー、フェンシング、ダンス、チームビルディング等であった。

(11) 休み時間

休み時間には屋外で遊ぶことが推奨されている。休み時間中の屋外遊びは学校職員が監視することが法的に義務付けられている。屋外で遊ぶ際はおやつを持参して遊ぶ合間に食べている児童が多い。ベンチに座っておやつを食べながらおしゃべりをして休み時間が終わってしまうこともある (娘談)。朝の始業前と授業後には学校の隣の屋外バスケットボールコートで男子児童 15 名ほどがサッカーをして遊ぶのが恒

例である。

6. 総括

スコットランドの学校教育の特徴として、自由なカリキュラムと教科横断的な学習、学校や教師の裁量が大きいことが挙げられる。カリキュラムの自由度の高さと教科横断的学習は児童生徒の主体的で深い学びを促す可能性が期待できるが、PISA 学力調査では日本の方が概ね得点が高いことも事実である。日本では具体的な学習指導要領の内容や検定教科書により一定の教育の質保証を図っているといえる。また、宿題や教科書、ノートの持ち帰りなどの日本の取り組みも基礎学力の定着に貢献していると考えられる。

こうした宿題のみならず、丁寧な学級経営や生活指導は日本の教師の特徴であるが、教師の長時間勤務にも影響していると考えられる。スコットランドでは教師の勤務時間のうち授業指導の占める割合がヨーロッパ諸国の中でも特に高い。また、学校の様々な手続きでオンラインのシステムが用いられていたことも業務の効率化につながっていたと考えられる。

また、スコットランドではLGBT 教育や大学授業料、給食費の無償化といった日本でも近年議論されている政策が先進的に実践されている。学用品や給食費、大学授業料などの公費負担が充実しており、家庭が負担する教育費は日本と比べて圧倒的に少ない。とはいえ、教育への公費支出の格差是正への効果や正当性に対する批判的な意見も存在する。日本でも教育機会の格差是正やインクルーシブ教育の議論がされているが、スコットランドでの成果や批判は参考になるだろう。

スコットランドでは健康問題とその社会的

格差が日本以上に深刻であり、児童期から全ての子どもが健康的な生活習慣の基礎を培うことが課題となっている。体育科では、健康格差の是正およびインクルージョンに価値を置き、社会性や情意面の学習のために教授モデルが推奨されている。一方で健康問題に関して、自動車通学、おやつ持参などの課題もみられた。日本の徒歩通学や給食指導を始めとする食育は児童の健康教育に重要な意味を持っていると考えられる。

スコットランドの教育は、総じて自由、自主的な学校生活が特徴といえる。体育授業時数は日本の小学校のよりも少ないが、柔軟なカリキュラムにより、通常授業の合間や健康週間などに積極的に屋外での運動を取り入れている。日本では学習指導要領に具体的な運動内容が例示され、全国で同様の授業が実施される。また、学習指導要領の内容の例示は学校の施設、設備の整備の充実に寄与している（佐藤，2011）。他方で、健康、運動に関する統計データは概ね日本の方が良好であるが、成人の生涯スポーツ実施率はスコットランドの方が高い。学校教育の最終的な目標が卒業後の生涯スポーツの実現であることを踏まえると、生涯スポーツにつながるような運動領域を柔軟に取り入れることや主体的な取り組みを促す学習者中心の授業方略の検討など、今後の議論の余地があるだろう。

教育の成果はカリキュラムや学校教育に加えて社会背景や家庭環境、国民の文化等の様々な影響を受ける。そのため他国との比較で単純にどのような制度が優れているかを論じることが難しい。互いの国で当たり前とされていることに議論の余地があることに気付くことはできる。本稿が日本とスコットランドの双方の教育の改善のための議論の一助となることを期待し

たい。

謝辞

本研究は、名古屋学院大学在外研修制度の支援により実施することができました。本学の支援およびご理解、ご協力をいただいた教職員の皆様に感謝の意を表します。

注

- 1) 誕生日が3月1日から8月31日の場合、5歳になる年の8月に、9月1日から2月末までの場合、5歳になる前の8月に入学となる。
- 2) 誕生日が3月1日から9月30日の場合、16歳になる年の5月31日以降に、10月1日から2月末の場合は同年の冬休み前に就学を終えることができる。
- 3) アメリカやイギリスの体育科教育学研究では、運動技能の学習に偏重しない理解や認知的学習、協力や責任、態度など社会的・情意的学習を重視した教授モデルが提唱されている。スポーツ教育モデル、戦術学習 (TGfU: Teaching Games for Understanding)、責任学習 (Teaching Personal and Social Responsibility)、協同学習などが提案されている (Metzler and Colquitt, 2021)。

文献

Association for Physical Education Scotland
(2021) Physical Education in Scotland in the 21st Century.

Aubert, S., Barnes, J. D., Demchenko, I.,
Hawthorne, M., Abdeta, C., Abi Nader, P.,
… Tremblay, M. S. (2022) Global Matrix 4.0

Physical Activity Report Card Grades for
Children and Adolescents: Results and
Analyses From 57 Countries, *Journal of
Physical Activity and Health*, 19(11), 700-
728.

BBC (2023) Free school meals for all Scottish
primary pupils will go ahead, says deputy
FM. BBC NEWS, 2023.5.4,
[https://www.bbc.com/news/uk-scotland-
scotland-politics-65479990](https://www.bbc.com/news/uk-scotland-scotland-politics-65479990)

Borbely, Daniel and Gehrsitz, Markus and
McIntyre, Stuart and Rossi, Gennaro and
Roy, Graeme (2021) Composite Classes, Class
Size and Human Capital Accumulation. Fraser
of Allander Institute, Glasgow.

Brown, S. (2021) How ‘free’ university is
pricing Scottish students out of a world-
class education. CAPX, 2021.8.20,
[https://capx.co/how-free-university-is-
pricing-scottish-students-out-of-a-world-
class-education/](https://capx.co/how-free-university-is-pricing-scottish-students-out-of-a-world-class-education/)

Butcher, J. (2022) Providing Free School Meals
To Wealthy Students Does Not Help Children
In Need. *Journal of Policy Analysis and
Management*, 41: 351-357.

Care (2023) 4-year olds in Scotland allowed to
change gender at school. 12 June 2023,
[https://care.org.uk/news/2023/06/without-
parental-consent-four-year-olds-in-
scotland-can-change-their-gender-at-school](https://care.org.uk/news/2023/06/without-parental-consent-four-year-olds-in-scotland-can-change-their-gender-at-school)

中国新聞 (2023) 無償の義務教育に潜む「隠れ教育
費」 100円単位のドリルから修学旅行まで「積
み重ね痛い」 対策乗り出す自治体も。中国新聞
デジタル, 2023.12.17, [https://www.chugoku-
np.co.jp/articles/gallery/399104](https://www.chugoku-np.co.jp/articles/gallery/399104)

中日新聞 (2022) 学校行事 見直し契機に コロナ禍
縮小でも 8 割「子の成長実感」. 中日新聞 WEB,
2022. 4. 1,
<https://www.chunichi.co.jp/article/445000>

Daily Record (2015) Kids left high and dry as
thousands of school pupils miss out on
swimming lessons. 2015, 8. 5,
<https://www.dailyrecord.co.uk/news/scottish-news/kids-left-high-dry-thousands-6195738>

Drummond, J. (2022) Comment: 'The national
policy on Standardised Testing is failing
pupils and teachers'. Children in Scotland,
<https://childreninscotland.org.uk/magazine-comment-the-national-policy-on-standardised-testing-is-failing-pupils-and-teachers-alike/>

Food Standards Scotland (2018) The Scottish
Diet: It needs to change.
https://www.foodstandards.gov.scot/downloads/Situation_report_-_the_Scottish_diet_-_it_needs_to_change_-_2018_update_FINAL.pdf

福ヶ迫善彦 (2018) これからの中学校体育授業のイ
メージづくり:何をどのように学ばせるか? 大日
本図書.

Gander, K. (2016) Scotland revealed as UK
country with most alcohol-related deaths.
INDEPENDENT,
<https://www.independent.co.uk/life-style/health-and-families/health-news/scotland-revealed-as-the-country-in-the-uk-with-the-most-alcohol-related-deaths-a6861226.html>

Green, C. (2021) Free university tuition in
Scotland has not benefited the poor, say
academics. INDEPENDENT, 2015. 12. 2,

<https://www.independent.co.uk/news/education/education-news/free-university-tuition-in-scotland-has-not-benefited-the-poor-say-academics-a6757546.html>

平尾剛 (2023) なぜ「体育の授業で運動が嫌いになっ
た」「大人になってスポーツが楽しい」という人が
これほど多いのか? 「できなさ」ばかりを強調す
る学校体育の大問題, PRESIDENT Online,
<https://president.jp/articles/-/71339>

Hughes, A. R., Johnstone, A., Bardid, F., &
Reilly, J. J. (2018) Results from
Scotland' s 2018 Report Card on Physical
Activity for Children and Youth, Journal of
Physical Activity and Health, 15(s2), S402-
S403.

J-CAST (2021) 体操服の「肌着禁止」、保護者の要
望で始まった? 女優ツイートに注目も...川崎
市教委「経緯は不明」J-CAST ニュース,
2021. 3. 16, <https://www.j-cast.com/2021/03/16407264.html?p=all>

川口穰 (2023) 加速する「ジェンダーレス制服」導
入の動き そもそも制服制度は必要なのか.
AERA dot., 2023. 4. 5,
<https://dot.asahi.com/aera/2023040400051.html?page=1>

Kirk, D. et al. (2018) Redesigning
physical education in Scotland. Redesigning
Physical Education, 145-155

Kirk, D., Bardid, F., Lamb, C., Millar, J., &
Teraoka, E. (2018). Redesigning physical
education in Scotland. In H. A. Lawson
(Ed.), Redesigning Physical Education: An
Equity Agenda in Which Every Child Matters,
pp. 145-155.

Macnab, S. (2021) 'Composite classes'
widespread in Scottish schools. The

- Scotsman, 2021. 2. 15,
<https://www.scotsman.com/news/politics/comp-osite-classes-widespread-in-scottish-schools-3133772>
- 毎日新聞 (2023) 改革進んだ? ブラック校則
 「実態調査した」84% 毎日新聞がアンケート.
 毎日新聞デジタル, 2023. 1. 14,
<https://mainichi.jp/maisho15/articles/20230114/dbg/048/040/009000c>
- McEvinney, K. (2019) The Scottish schools tackling waste and poverty. BBC,
<https://www.bbc.co.uk/news/uk-scotland-50673342>
- Metzler, M. & Colquitt, G. (2021) Instructional Models for Physical Education (4th ed.). Routledge.
- 文部科学省 (2021) 令和2年度 教育委員会における学校の働き方改革のための取組状況調査結果.
https://www.mext.go.jp/content/20210107-mxt_zaimu-000011455_1.pdf (accessed 2021. 5. 30).
- 文部科学省 (2022) 令和3年度子供の学習費調査.
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa03/gakushuui/kekka/k_detail/mext_00001.htm pdf (accessed 2023. 12. 25).
- 中曽根陽子 (2022) 学習指導要領で重視される「探究学習」が、日本でなかなか広がらないワケ 正解のない予測困難な社会に対応するには. 東洋経済オンライン, 2022. 5. 10,
<https://toyokeizai.net/articles/-/585154>
- National Record of Scotland (2022a) Drug-related deaths in Scotland in 2021
- National Record of Scotland (2022b) Life Expectancy in Scotland, 2019 - 2021, Report.
- <https://www.nrscotland.gov.uk/files/statistics/life-expectancy-in-scotland/19-21/life-expectancy-19-21-report.pdf>
- NHK (2020) 校則 先生たちの本音. NHK みんなでプラス,
<https://www.nhk.or.jp/minplus/0012/topic012.html>
- OECD (2021) Scotland's Curriculum for Excellence Into the Future.
- Office of National Statistics (2018) Personal well-being in the UK: January to December 2017.
<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/wellbeing/bulletins/measuringnationalwellbeing/januarytodecember2017>
- Parr, H. (2023) Seasonal affective disorder (SAD) affects more people in Scotland than you might think. The Scotsman, 2023. 10. 24,
<https://www.scotsman.com/news/opinion/columnists/seasonal-affective-disorder-sad-affects-more-people-in-scotland-than-you-might-think-professor-hester-parr-4381964>
- Public Health Scotland (2020) Diet and healthy weight.
<https://www.healthscotland.scot/health-topics/diet-and-healthy-weight/food-and-diet>
- Reilly, J. & Bardid, F. (2021) Active Healthy Kids Report Card Scotland 2021.
<https://www.activehealthykidsscotland.co.uk/files/2021/11/LONG-FORM-ACTIVE-HEALTHY-KIDS-SCOTLAND-REPORT-CARD-20211.pdf>
- Ross, J. (2017) This Is Why Not Everyone In Scotland Thinks Free Uni Tuition Is A Great Thing. BuzzFeed News,

- <https://www.buzzfeed.com/jamieross/this-is-why-not-everyone-in-scotland-thinks-free-uni>
- 産経新聞 (2022) 「体育座り」やめました、集中力落ち腰痛原因の声も…専門家「他の座り方検討すべきだ」. 産経新聞オンライン, 2022. 10. 4, <https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20221004-OYT1T50190/>
- 笹川スポーツ財団 (2023) スポーツライフ・データ 2022.
- 佐藤豊. (2012). 日本体育科教育学会編 (2011) 「体育科教育学の現在」 創文企画. スポーツ教育学研究, 32(1), 59-62.
- The Scotsman (2018) Primary one children will be told 'your gender is what you decide'. 2018.8.7, <https://www.scotsman.com/news/primary-one-children-will-be-told-your-gender-is-what-you-decide-582881>
- The Scottish Government (2022a) Scotland leads UK on university students from deprived areas. 31 May 2022, <https://www.gov.scot/news/scotland-leads-uk-on-university-students-from-deprived-areas/>
- The Scottish Government (2022b) The Scottish Health Survey 2021 - volume 1: main report
- Tes (2019) Teachers brand P1 tests 'a waste of time'. Times Education Supplement Magazine, <https://www.tes.com/magazine/archive/teachers-brand-p1-tests-waste-time>
- Thomson, D.M. (2022) Free school meals for rich kids? ThinkScotland, <https://thinkscotland.org/2022/03/free-school-meals-for-rich-kids/>
- 徳岡慶一 (2018) カリキュラムマネジメントの課題 : 教科等横断的視点を中心にして. 教育実践研究紀要, 18, 133-142.
- World Economic Forum (2022) Global Gender Gap Report 2022. <https://www.weforum.org/publications/global-gender-gap-report-2022/>
- Zero Suicide Alliance (n.d.) Scotland Dashboard. <https://www.zerosuicidealliance.com/ZSA-Resources/dashboards/national-dashboards/scotland> (accessed 2023.10.31)